

現代日本文学館

38

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 38

石川達三

昭和四十一年十月一日第一刷

著者 石川達三

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一

振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

Printed in Japan

本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

石川達三伝 山本健吉 3

私ひとりの私 29

四十八歳の抵抗 139

結婚の生態 322

赤虫島日誌 439

注解 475

解説 484

年譜 490

挿
画

生沢朗 「私ひとりの私」 「赤虫島日誌」
三雲祥之助 「四十八歳の抵抗」
佐野繁次郎 「結婚の生態」

石川達三伝

山本健吉

陸中花輪に一泊し、発荷峠を越えて十和田湖に出たことがある。花輪線の終点から観光バスに乗り、能代川の支流大湯川に沿って、彩つきそめた秋の山道を上って行ったが、ふとバスガールの、

「ただいま毛馬内でございます。文豪石川達三氏の故郷でございます。」

という声に驚かされた。石川氏の故郷は、こんなにも山の中の村だったのかと、感慨の深いものがあつた。

毛馬内は南部領の辺境であつて、館（小型の城）が置かれ、藩制時代には南部家臣桜庭氏がこの地にあつて二千石を領し、辺境守護に任じた。だが、石川氏がこのアイヌ語源の村に生まれたわけではない。何時のこととも知れぬ遠い昔から、この羽後国の東北端鹿角郡に、石川氏の先祖は定住していたのであつたらう。アイヌ民族の血もはいっているかもしれないと、氏は言うのである。系図によれば、多田満仲を祖とする摂津源氏の流れを汲み、満仲の孫頼遠曾孫有光が奥州征伐の功によって奥州磐城国白河郡石川郷の地を賜わり、義家に代わつて仙道七郡を統治し、石川姓を名乗つたと伝える。あるいは物部氏の後ともいう。この石川氏の流れを名乗る人たちが奥州諸所に散らばり、そのうち陸奥国南津軽郡石川の楯（大仏鼻城）に拠つた一族があつて、領主南部氏に叛いた津軽氏に攻め滅ばされた。そ

の石川氏の生き残つた者が毛馬内にはいつて、南部氏に仕えたのであろう。家紋は笹龍胆を用いている。僧侶であつた時代もあるという。ただし以上は、石川家の伝説時代である。

祖父儀平は南部藩の祐筆であつた。文筆の仕事である。

明治になつて職を失い、士族の商法にも失敗し、上京して東京府下大森のあたりに住んだ。父祐助はその三男である。長兄は伍一という。彼は石川家の理想像として語り伝えられている。そのことは、石川氏の少年時代に、石川家ではしばしば彼の名が語られ、暗黙のうちに彼のようになることを求められたということである。麻布光林寺には、父儀平によつて誌された漢文の墓碑が建てられ、裏面には「本碑石ハ後世子孫ノ為メ之ヲ保存ス」と書かれている。表は簡潔な伝であるが、黒龍会編の「東亜先覚志士記伝」には、もっと詳しく伝えられている。

伍一（慶応二年—明治二十七年）は、十四のとき東京に遊学し、興亜学校に入つてシナ語を学んだ。この学校には大陸に志を寄せる志士が多く集まつたが、彼も明治十七年上海に渡り、シナ問題に大いに画策していた海軍大尉曾根俊虎のもとでシナ事情を研究し、次いで荒尾精が漢口樂善堂（岸田吟香の樂善堂の支店）にあつて同志を糾合したとき、馳せ参じた。彼らの大方針は「世界人類のために第一着にシナを改造すること」にあつた。同志たちはシナ各地に散つて地理人情を調査したが、伍一は古えの巴蜀の地、



四川^{せいせん}全域を歩き、西藏^{せいざい}地帯にまではいりこんだ。辨髪^{べんぱつ}を蓄え、シナ服を着、シナ語を操^{あやつ}って、純然たるシナ人の態^{かたち}を装^まって、商売を営みながら冒險の旅を試みたのだった。伍一はことにシナ語に通ずることが深かったから、その調査報告書とそれに附した地図は、詳密を極めていた。

明治二十七年、日清の国交が破れる直前、彼は天津^{てんしん}にあったが、公使、領事、居留民等の一行が引き揚げるとき、伍一は鐘崎^{かねさき}三郎とともに留^{とど}まって敵の軍事行動の諜報^{しやほう}に従い、敵の官憲の眼を欺^{あそ}くため、いったん引揚船に乗り込み、夜陰に変装して船を脱した。これは清国官憲に顔を知られ、警戒されている彼としては、大胆極まる行動であった。豊島^{とよしま}沖の海戦は、彼が清国側の兵員輸送の日時を偵知^{ていし}して、

報告した結果、日本の海軍がこれを要撃したものという。だが、いくばくもなく捕えられ、天津城外で従容^{じゆうよう}として銃殺の刑に処せられた。殉難^{じゆなん}のとき、二十九歳であった。従五位を贈られている。

彼は詩文をよくした。文武両道の志士として、国事に殉難したのである。ここに武の家で同時に文の家でもあった石川家の家風の発揚があった。だが文と言いい、武と言っても、国家のために有為であることが根本である。石川家には軍人となった人が多いが、文に志した人も、やはり天下国家のためという考えに、どこか繋がっていて、ペンを剣に代えようとする志がある。

儀平の子供たちの中では、寿次郎、漣平^{れんぺい}が武を代表し、祐助、六郎が文を代表する。伍一はその両方を兼ね、それゆえに石川家の理想像であった。

祐助の次兄は寿次郎である。彼は海軍に入り、日本海海戦のときの軍艦厳島^{いづみ}の副長として戦功を立てた。兵学校時代に広瀬武夫と同級生で、柔道が強かった。新橋の芸妓を妻にしたが、士族石川家の厳格な家風としては、いったん弟祐助の養女として、改めて入籍しなければならなかった。戦後間もなく、病のために急死した。石川氏が少年のころ、周囲からぼんやり海軍軍人になることを期待され、本人もその気になっていたのは、この伯父^{おや}の存在が大きな影を落としているのである。

伍一の家は、実弟漣平が継いだ。漣平は儀平の四男であ

る。彼は累進して陸軍中將になった。伍一の遺稿集『東亜の先覚 石川伍一と其の遺稿』は連平の編である。

五男（ただし、長女を入れて六番目の子供）六郎は、早稲田大学を出て国民新聞の記者となり、馬場恒吾とともに社長徳富蘇峰の両腕と言われ、蘆花の姪と結婚した。頭の鋭い人で、馬場が「冷徹氷の如き」と評したという。この叔父とは、後になって氏は大きな関係を持つようになる。

石川家のような貧しい家庭に生まれて、国家の有為の人物として志を遂げようとする血氣の青年は、当時であって、軍人になるか、操觚界に入るか、どちらかであったろう。これは明治前半期の国権、民権伸長の時代には、ペンと剣とが青年のあこがれであったことを物語っている。だが父祐助は、もっとも地味な教育者としての道を選んだのである。

これらの卓抜した兄弟たちに較べると、父祐助は一見やや霞んで見える。だが、彼は東京の伊庭塾に学んで、「神童のほまれ高く、文武兩道に秀でていた」と氏は書いている。そのため、塾長伊庭想太郎に見込まれて養子となり、数年伊庭姓を名乗った。伊庭は東京市議會で星亨を刺殺した人物である。その事件の前に、伊庭は身辺を整理し、養子縁組も解かれたのであった。その挫折感が彼のその後に、大きな影を落としたことが想像できる。

祐助はその後東京高等師範学校に入り、漢文と英語の教師資格を取り、秋田県立横手中学校に赴任した。ここで彼

は角館町の旧家栗原家の娘うんと結婚し、明治三十五年には長男晋を、三十六年には次男悌次郎を生んだ。そして三十八年七月二日に、三男達三が生まれた。四十一年には祐助は県立秋田中学校に転任したので、氏は生地横手については、何の記憶も持っていないという。

II

氏は自分の最初の記憶は、母でなく父であったと言っている。母うんは生涯に九人の子供を生み、大正三年に三十七歳で死んだとき、まだ乳呑み子をかかえていた。次々に弟妹が生まれたので、氏は母の懷を離れることが早かったのである。だが氏の母親への思慕の深さは、氏の自伝「私ひとりの私」を読んでも、随所に拾い出すことができる。

母の実家については、小説「三代の矜持」に書かれている。角館町に何代か続いた地主兼金貸しで、『田舎びた大きな家の中には先祖の靈の歩きまわる足音が絶えず聞こえてくる』とでもいうような憂鬱な空気が重くとぎしていた。『亭主は表座敷の炉の前に端然と坐り、近づき難いきびしきと見事な落ちつきとを示し、妻ある男とは見えない冷やかな様子であった。妻は一段下がった茶の間と広い台所と寢室とで生涯を終わり、一度として良人と食事をともにする光榮を許されないが、他人に対しては大家の主婦としての貫禄を失うことがない。』

「三代の矜持」には三代目の兄弟が書かれているが、そのモデルは、母の甥である。

母は角館小町と言われたほどの美人であった。一重まぶたの、富士びたいで、そして髪黒い、きれいな肌をした、真白い牡丹の花のような、一種やわらかい重みのあるような感じの、優しい女だった。『私ひとり（の私）』日清戦争の直後、数え年十七歳ぐらいで、まだ仙台の二高の学生であった二十歳ぐらいの青年と結婚した。子弟を仙台へ遊学させるというのは、特別富裕な家庭である。翌年女の子を生んだが、良人は盲腸炎で頓死し、早くも寡婦にな



父祐助の一家（祖母）・祐助・左より子六郎・澁平・寿次郎・儀平・伍一・そめ子

って、婚家に娘を残したまま、実家へ戻ってきた。二、三年して祐助と再婚した。そういう母の経歴を、氏はずっと後になるまで知らなかった。偶然の機会に、その父の違う姉とも、たった一度逢うことができ、少年の氏にやわらかく美しい印象を残した。

秋田では、父は英語の主任教師となり、やがて教頭になった。夏休みには必ず上京して英語の研究会に出席し、祖父を見舞い、二人の兄はすでに死んでいたが、在京の弟たちと会った。積極的、行動的で、中央に活躍の場を持っている兄弟たちの中で、ひとり雪深い東北の片田舎に逼塞しているという思いが、彼にはあったであろう。彼は寡黙であり、むしろ話下手であり、それに東北訛が抜けず、家では何時も書斎に籠もって書見をしていた。子供たちにも何一つ小言を言わず、放任主義で、俗事には無為無能であり、それだけに責任は母の一身にかかり、母は子沢山の家庭をかかえてひとりで動きまわっていた。

家では男尊女卑と厳格な長幼の序が守られていた。男の子はすべて母より上席で、ことに長男は父の次であり、対外的には父と同格だった。長兄晋が満一歳になるかならぬころ、父の不在中、囲炉裏に落ちて顔に火傷を負った。報らせを受けて、父がすぐ家へ還ると、母は上がり框にびったり両手をついて、「あなたの大事な子供に怪我をさせてしまいました」と言って、泣いて詫びたという。母は生涯、このことを苦にしていたが、晋は何時も「お母さん、おれは軍人になるからな。顔なんかどうでもいいんだ」と慰めていたという。そして、母の死後、彼はこの誓いを実行して幼年学校に入り、陸軍大佐まで進んだ。敗戦の日に、近衛師団参謀長になった。彼も士官学校時代に野口米次郎に傾倒していたくらいだから、文武両道の素質はあった。

次兄悌次郎は、気持がやさしくおっとりしたところのあった長兄に対して、鋭く頭が働く秀才で、子供のころ昆虫などに意味のない残酷さをふるような強烈な性格があった。石川氏の中学時代の同級生金沢寛太郎氏は、五年生の悌次郎が何かの展覧会るとき、世界状況を諷刺した時事漫画を、長い廊下の壁一面に描き連ねて、自分たちをたまげさせたことを回想している。石川氏は作文に巧みであったが、悌次郎は「達三の文章はいつも俺が直してやっているんだ」と言っていた。（金沢寛太郎氏「詩魂」）彼はのちに新聞記者になった。石川氏が幼少年時代に、これらの兄たちから受けた影響は大きいものがあつた。石川家の兄弟たちはそろって好学心が強く、学校では首席で通した。この三人は、いつも共同戦線を張っていた。石川氏は従順な弟で、兄の命令には絶対服従であつた。氏と一つ違いの四男勝四郎は、生まれるとすぐ里子に出されていたが、長じて家に引き取られてきたとき、彼は三人兄弟の共同戦線から疎外されて、泣くような目に会っている。

石川氏の母親に対する回想は、つねに美しく彩られていて、氏が小学生時代に、母はまだ若く美しくして死んだことが、氏の思慕をいっそう掻き立てるのである。母が何かの用事で角館の実家へ帰ったとき、一メートル以上も降り積もった雪の中を、大塚（おほづか）ばたまで迎えに行つて、襦（じゆ）に乗った母が、頭からすっぽり毛布にくるまり、顔だけが白く正面を向いてにっこり笑い、牡丹雪（ぼたんゆき）の縞模様（しまよう）の奥に、雪女の

ように美しかったという。新しく母を発見したような、あるいは日本の女性の美を発見したような気持ちだったという。

あるいは、昔話を母

からたくさん聞かされた思い出。《母は時間をかけて、私が面白さにじりじりするほどゆっくりした口調で、話して聞かせるのだった。》（「私ひとりの私」）

母を中心にして、兄弟三人で遊びながら、楽しく暮らしていた秋田時代が、おそらく氏にとって一番平和な時代であつたろう。里子に出ていた弟が家に帰って来たころから、家の空気が一変した。それは父が学校騒動に捲きこまれて教頭の職を辞し、秋田を引き上げようとしている時期であつた。それは何より母の起居動作に現われた。おっとりとした静かで優しい女だった母は、一日中懺（なぐさ）がけて働く母、子供たちに対しても厳しくこわい母、五人の男の子と一人の女の子とをかかえて、息つく暇もない忙しい母になった。

秋田を去って上京して来たとき、石川一家にとって、第二の時代が始まった。石川家の子供たちは、新しい試煉（しれん）の中で成長して行くのである。

III



中学3年の石川（左・大正10年）



大正14年「薔薇盗人」同人と（右から三人目）

秋田中学の学校騒動は、教頭である祐助と校長との意見の対立に始まり、教師は兩派に分かれて争った。明治四十五年、石川氏が同市の築山小学校に入學したばかりの年であった。その年の四、五月ごろ、ほとんど一月ほどのあいだというもの、毎日のように教員たちが父の書齋を訪れ、石川家は画策本部のごとくであった。結局、教頭派は敗れて、父は職を辞した。

父が三十七、八歳のころで、これは父にとっては、生涯にたった一度の、対社会的に積極的な動きを示した事件であった。おそらく教員中の不平分子に担がれたものだったろうと想像する。それは彼にとっては第二の挫折であった。《過去をふりかえることは、あまり好きでない》（「還らぬ月日」）と、石川氏は言っている。歴史小説を書かず、私

小説をほとんど書かぬことも、氏のそのような性情に発している。何よりも現在に対する関心が旺盛であり、しかもそれは「私」よりも「公」にかかわることが多い。文武両道に通じることを理想とした石川家の家風から見れば、氏は文の道を選んだ代表的存在であるが、そこにはやはり軟より硬に多くかわろうとする傾向が見え、氏が丹羽文雄、あるいは舟橋聖一ではありえなかった理由の遠さが分かるのである。

「私ひとりの私」（昭和四十年）に到って、氏は始めて幼少年時代の回想を書いた。それは氏の幼少年時代を語る唯一の文献と言ってもよい。氏の初恋や性の眼覚めについて知りたい人は、この作品を読めばよい。私もまた、氏の幼少年時代を語ろうとすれば、勢いこの自伝的小説に拠らざるをえないのだが、それは本集に収められているのだから、できるだけ簡略に従い、要点だけに止めたい。

石川一家は上京して、大井町家に落ちつき、氏は大井町小学校にはいった。六月七月の二カ月間通っただけであるが、東京の子供たちが田舎出の子供に話しかけようとせず、受持の教師もまったく無視したことに、氏は痛憤の情を発している。《校庭でたったひとり置き去りにされていた時の孤独感を、私はいまだに忘れることが出来ない。》と書いている。

九月になって、一家は新しい任地、岡山県上房郡高梁町に出発した。そのとき子供は七人にふえていた。数え年十

一歳の晋を頭に、悌次郎、達三、勝四郎、妙子、伍平、忠である。それは岡山県の奥地の、水のきれいな高梁川に沿った、小さく閑寂な城下町であつた。町の北方臥牛山頂には、板倉氏五万石の居城、備中松山城があつた。川田遷江（川田順の父）が最後の国家老で、明治初年には京都の同志社系のプロテスタントのキリスト教がはいりこみ、町民から投石されながら布教した、その石を礎石とした教会堂が、昔の姿で残っていた。（詩魂）父祐助は、ここの県立中学の英語主任教師だつた。教頭から主任教師に下がつたのだから、収入も減り、家族もふえて、切りつめた生活を強いられ、その労苦の一切は母ひとりの肩にかつたのである。

秋田、東京大井町、高梁と三つの町を知り、その比較が氏の小さな世界観を形作つた。人情、風俗、言語の相違を知り、氏は新しい環境に適合しようと努力し、そのことが氏の心を鍛えたようである。

高梁小学校では先生も生徒も親切に、この転校者を受け容れてくれた。ことに隣家の貧しい八百屋の息子、渡辺は、始終世話を焼いて、氏を遊び仲間に入れてくれた。この「小さな親切」「小さな友情」が、氏を孤独から救い、氏は四カ月ぶりに始めて一人の友達を得た。そして大井町の小学校の生徒たちに、改めて新しい怒りを燃やした。

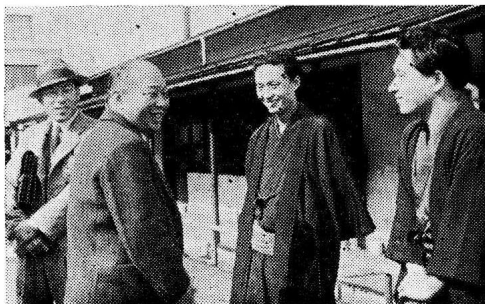
氏は学校でも町でも、「先生の子」と呼ばれた。この小さい町で最高の名誉を与えられているのは県立中学校長、

次いで私立順正高等女学校長と小学校長、それから町長、警察署長、郵便局長であり、中学校の先生たちは町では最高の知識階級として信望があつた。だから「先生の子」という称呼には、尊敬の意味と、その尊敬に価する行為を要求されるという責任の意味とがあつた、

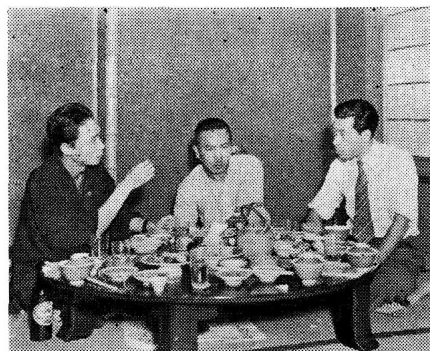
と氏は言っている。氏は中学を卒業するまで

の十二年間、この窮屈な肩書をつけたまま過ごした。このことは、相当深く氏の性格を決定しているはずである。氏はアウトロウウのに崩れた反抗的姿勢を持ちつづけた、私小説的発想を中心とする日本の文壇で、その反対の存在として終始している。氏は社会悪を摘発するときでも、決して反社会的ではなく、責任倫理的なのである。長幼序列の厳しい士族の家庭で形成された躰が、この時代には、「先生の子」として社会的に規制されたことから、より揺がりを持った秩序の意識として成長した。

氏は二年から卒業のときまで、成績は何時も一番であつ



昭和13・4年ころ東宝撮影所にて、左より石川・柳家金語楼・高見順・丹羽文雄



昭和16年・南方座談会・左より高見順・小松清・石川

たが、終始副級長であった。二番か三番であった中学校長の息子が、何時も級長であった。その「社会の不正」に、氏は五年間、黙って堪えていた。堪えるということとは、もと石川家の驍（きょう）の中で形成された氏の強靱（きやうじん）な性格であった。

だが、秋田時代にはともかく自然に保たれていた家庭の秩序は、高梁においては、驚くべき多忙さの中にあつた母の腕で、わずかに支えられていた。家事の一切を母に押しつけて、家へ帰るとすぐ書斎に引き籠もつた父は、氏には「怠惰」に見えたのである。母は子供たちに取って、怖い母であつたが、同時に巨大な母、信頼すべき母であり、その有難さと、時に見せる優しさが、身にしみて感じられる母になつていた。多忙を極めた母は、一々ひとりひとりの

子供のことにこまかくかまつてはいられなかつたが、子供たちは、多忙な母と怠惰な父とのあいだにあつて、自然に自主性と独立心と責任感を養つて行つた。里子に出されて、始めはきびしく母を拒否し、手のつけられない悪童になり、母

をもつとも精神的に苦しめた弟勝四郎も、何時かこの上ない母思ひになつていて、母が亡くなつたとき、誰よりも激しく号泣したのである。高梁に移つてから二年三カ月しか、母は生きていなかった。肉体的、精神的な心労から、彼女は脳溢血に倒れた。三十七歳であつた。母の死については、氏は短編「少年記」に書いている。亡くなつたあと、押入の大きな行李には、八人の子供たちの着物が夏と冬に分けてきちんと整理されており、戸棚の中には雑巾が十五、六枚も縫つて重ねてあつた。女中も使わず、あの大家族をかかえて、よくもあれだけ行き届いたものだ、人々の感嘆の的になつた。父は文才にすぐれ、母は数学の才にすぐれていたと氏は言うが、人間が生きて行く上で遭遇する運命に、避けることなく正面から立ち向かい、自分の責任を果たそうとした女性として、子供たちに与えた精神的感化がどんなに大きかつたか、量り知れないのである。

IV

石川氏にとって母の死は、第二の転機であつた。大家族をかかえて途方にくれた父は、氏とすぐ次の弟勝四郎とを東京の叔父たちに引き取ってもらつて、一時を切り抜けようとする。氏は東京市外佐原郡戸越にあつた叔父石川六郎の家に引き取られた。前に書いたように早稲田大学を出て国民新聞社にはいり、馬場恒吾とともに蘇峰の両腕と言われた人である。蘆花の姪（めい）春を妻にもらつていたから、そ

の信頼のほども分かるが、先年亡くなって、若い後妻文子と二人、女中を置いてひっそりと郊外暮らしをしていた。

母のきりりとした姿に較べると、叔母は綺麗な着物をぞろりと着たしどけない風であつたが、優しい感じで、だんだん好きになり、それに反して叔父には親しまなかつた。

だが結局、叔母も叔父も他人なのだという事を思い知らされる。他人の中で、性格的に「しぶとさ」を鍛えられて行く。

叔父六郎には、氏を養子として迎える気持がなくなつたらしい。父祐助にもそういった期待があつたようである。だが少年は、叔父が自分を「居候」(いこう)として扱っていることを、敏感に感じ取っていた。結局叔父も叔母も、母ほど真剣に自分のことを心配してくれる人たちではなかつた。氏は居候の立場を知っており、他人の飯を食うということが如何なるものであるかを嗅ぎ分けていた。氏は命ぜられた通り、鶏に餌をやり、畑仕事の手伝いや草取りをし、使い走りをした。最悪の心理状態になって、叔父や叔母に敵意を抱き、出すように言いつけられた葉書を破り棄てたり戸棚にしまつてある館パンを黙って食つて頑強にその行為を否定したりしたこともあつた。他人の飯を食べたために、自分がどれほど歪められ傷つけられたか分からぬと、氏は言う。自分はどんな風に振舞えば一番人の氣に入られるようになるかを考え、自分を行儀のよい子供に仕立てるとともに、心と行為とに分裂を起こし、不正直な子供になつた

と回想する。

叔父の家にあつたのは七カ月間であつた。この時期に自分が一番「わるい事」をしたようだと氏は言う。その間に、高梁では父が再婚していた。新しい母の手紙は優しい言葉に満ちていたが、氏はそれを生母の代用品と感じ、本物と混同することはなかつた。彼女は三十歳くらい、近所に住み、私立順正高等女学校の国語や作文の先生であつた。この学校はミッション・スクールというのではないが、校長は町の教会の牧師を兼ね、彼女もクリスチャンであつた。七人の継子(末女嘉志子は養女にもらわれて行つた)のいる家庭へ、周囲の反対を押し切つて初婚の彼女がとつぐ決心を固めたのは、「残された大勢の可哀相な子供たちを一人前に育てあげることが出来たら、私の生涯の仕事として充分だ」と考えた、教育家的理想からであつた。彼女にとつてそれは「神に誓つた結婚」であつた。だが父にとつては、それは自分の困難の肩替りをしてもらうことであつた。実母の努力は家事を整理し、子供たちの健康を維持して行くことだけで、その外のことはおのずから備わつていて多忙な中にも彼女は泰然としていた。継母の努力は家事や家計の外に、絶えず自分の位置を確かめ、その位置を守り、実母ならば放つたらかしておくところを、一々努力しなくてはならなかつた。そこに彼女の誠実さがあり、理想があつた。一家の中心に坐つてはいたが、彼女にはこの家の中での歴史がなく、家の中での位置の浅さがあつた。子供た

ちにとつて、父は心の通わぬ唐変木^{からへんぎ}であり、母は究極のところ他人であつた、と氏は言う。

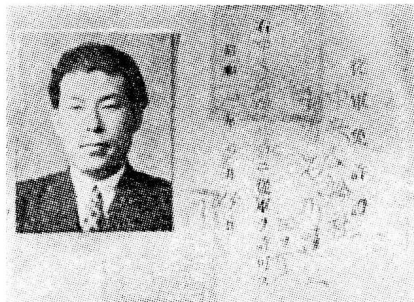
母は家へ来てからも、女学校の教師をしていた。これまでも同居していた老母と姉の子とを連れて家族に加わつたから、父の月収だけでは家族を養いきれなかつた。この十一人の家は、「家庭」というより「合宿」のようだった。子供たちを家庭につなぎ止める鞆帯^{じょうたい}がゆるみ、何となく子供たちの気持がばらばらになつた、と氏は言う。家族という血縁によつて結ばれたインフォーマルな小社会に、契約によつて結ばれたフォーマルな利益社会の空気がはいりこんだ。長男から四男までの四人の男の子たちはつねに孤独の心を抱^{かか}っていた。そして彼らの魂には、親を頼りにしない強い独立心がはぐくまれ、同時に個人主義的なエゴイズムも育つて行つた。

子供たちは役割を決めて家事を手伝い、食べることは当然の権利として、競争で食べた。新しい母は二男二女を生んだが、自分の子と先妻の子とに分け隔てをしないことを、何よりも自戒とし、誇りとした。この努力の如何に苛烈^{かれつ}なものであつたかを、幼い子供たちは後になって思い知らされた。

クリスチャンの母にすすめられて、教会の日曜学校にも通い、信仰にはいらなかつたが教会に親しみ、キリスト教に関する知識をえた。氏の文学には、どこかプロテスタントイズムの匂^{にお}いが感ぜられ、その原因はやはり少年時代

の環境と経験に基づくものであろう。夜の集会で大人たちの祈りや告白や合唱を聞いても、共鳴しなかつたと言っているが、心への滲透^{しんとう}はもつと深部で、無意識のうちに行なわれていただろう。氏に「使徒行伝」という作品があり、その主人公は、この町でも有名なほどの熱心なキリスト教信者であつた、中学の漢文教師麻川亀太郎先生であつた。早くから同志社系（組合派）の布教の盛んだつた町だから町の雰囲気——少なくとも石川氏が触れることの多かつた町の知識層の雰囲気——に、プロテスタント的なものが流れていたのであつたろう。組合教会派は、霊的・戒律的な要素は乏しいが、すこぶるリベラルで実行的であり、氏の母もまた実行力に富んだクリスチャンであつた。

東京の叔父六郎の意志で、氏は上京して府立一中（今の日比谷高校）を受けることになつた。合格したら養子にして、一中、一高、帝大という秀才コースを氏に歩かせようという下心が、叔父にはあつたらしい。だがこの優等生は、第一日の国語の試験に、「夥^{おほ}し、



昭和13年 中央公論社より派遣された時の從軍免許証

著し」などの言葉の意味を記せという問題が出て、つまず

いてしまった。意味は分かっているが、その意味を他の言葉で言い現わすことは出来ないと思い、不確実な答案を出す気になれなかったのである。氏はさすがと帰郷したが、高梁中学の入学試験はもう終わっていた。それで、同級生の大部分は中学生になっていた一年間を高等小学校に通うという屈辱を嘗めさせられるのである。その屈辱の一年間が氏の人間を変え、学校の成績にしくなり、優等生石川達三に終止符が打たれるのである。これはもちろん少年の張りつめていた気持の「崩れ」ではあるが、長い眼で見れば、これは石川氏に取ってよかったのである。

翌年四月、氏は高梁中学に入学した。一歳下の弟勝四郎（昭和四十一年に死亡）は、高等小学校に入った。中学二年のころは、ほとんど記憶に残るようなことがないと言っている。少年時代の理想を失い、立身出世の夢もなくして、怠惰に日を暮らしていた、やや精神的空白の期間であったろう。雑誌「日本少年」や、「立川文庫」を三、四十冊も読んだが、要するに暇つぶしで、心に残るものはなかった。母の親戚の亀山という本屋から兄が借りて来るのを、また借りて読むのである。だが黒岩涙香翻案「嚴窟王」（モンテ・クリスト伯）を耽読したことは、氏に始めて読書の面白さを教えた。

高梁中学で机を並べていた金沢寛太郎氏は、次のようなことを書いている。『石川家では、毎週土曜日の夜には、

家族あげての学芸会が開かれる慣わしのであった。ある時彼は小さな手帳をこっそり私に見せて、『こんどの土曜日には、これを朗読しようと思っているんだが、どうかね』といったことがある。それには新体詩らしいものが綴られてあったことは覚えているが、どういう詩だったか、それに対して私がどんな批評を加えたか思い出せない。』（詩魂）この学芸会は、もちろん、教育熱心な母の発起にかかる、クリスチャンらしい企てであった。学校の学芸会でも、氏は目立つ存在だったが、このころようやく氏の胸に文学的な欲求が目覚め出したことを、この挿話は教えてくれる。

大正十年、父は岡山の私立関西中学に転職することになった。すでに恩給を受ける資格があったので、恩給を受けながら私立中学に奉職しようとしたわけであるが、氏だけは町の醬油醸造業者である菊菜家があずかってくれることになり、高梁中学に残った。菊菜家の次男が小学校からの同級生で、中学では氏より一年以上級だった。一年間、なかば下宿人、なかば居候のような恰好で、またしても「他人の飯」を食う経験を味わったのである。

菊菜氏は短編「交通機関に就いての私見」に登場する菊岡仙太郎である。菊菜氏の書棚からトルストイの「復活」の完訳を見つけ出して通読したのが、文学的開眼をもたらした、と氏は言う。ネフリエードフがカチューシャを抱いて、中庭を横切って自室へ連れこむときの美しい描写に、